

## 「遅れ」の意識、「成熟」の意識

—「縮小社会」への道、その諸方策について—

「GDP が増えなくても、社会経済が縮小しても、物・人・事が地域を巡回することができれば、人は十分幸せである」というのは、これは、「成熟」した社会意識であると言えよう。それに対して、発展、成長をいつも目指している意識は、自らの後進性を強く意識していると言えよう。

この「遅れ」と「成熟」という視点から、田舎の人たちや、農民の意識についていろいろと思考してみよう。これは、田舎暮らしの意味について考えることであり、そして、「縮小社会」の社会像とその移行を思考するに通じていることでもあろう。

### 目次

1. 社会経済が縮小しても、物・人・事が巡回すれば、人は十分幸せである!
2. 田舎暮らしの自給者としての農民は、社会の変化になかなか気づかない
3. 農民特有の思考形態、問題の鮮明化
4. 根をつけるために、「縮小社会」を論じるための基礎的作業

#### 1. 社会経済が縮小しても、物・人・事が巡回すれば、人は十分幸せである!

9月の「縮小社会研究会」で「株式会社トビムシ」小村力研究所所長、株式会社西粟倉・森の学校 代表取締役」の牧さんは、岡山県西粟倉村では2008年に「百年の森林構想」を掲げ、森林再生からの地域再生を目指して小さな村の力を最大限に引き出していくために力を入れてきた、と話された。それは、村で活躍する起業家の発掘・育成であった。それは、よそ者を引き入れることであった。

要は、「市場経済」に「互酬性」を加味した生き方を模索しているのだと思われる。田舎での「互酬性」的な生活に価値を見出していこうという都会から来た「よそ者」と、地元で暮らしていた「馬鹿者や変人と周りから評価されていた人」がタッグを組んで新規事業を立ち上げていくことのできる可能性をはなされたのだと思われる。そして、それに今まで通りの政策ではどうにもならなくなったので、大きく方向転換を図ろうとする地方自治体が支援している事例を話されていた、と私は思っている。

ここで最も大切なことは、この自治体が資金と人を出さないと、この交換関係(経済)は回転し始めないことであろう。このように自治体の力で駆動力がつくと、ひよっとす

ると、この経済は続けて回り出すかもしれない？

このような話は、『里山資本主義』(藻谷浩介・NHK 広島取材班 角川書店)にも書かれている。昔は人間が手を入れてきたが、今は休眠資産を再利用することで、原価 0 からの経済再生をしようとしている事例が書かれている。これは、崩壊しかけている地域社会の復活を果たそうとしている物語であろう。

よそ者を受け入れことができたのは、素晴らしいことである。『里山資本主義』という本には、この西粟倉村と同じような過疎地の取り組みが書かれている。そこでは、同じように、他の地域からの流入者を積極的に受け入れている。

繰り返すが、これは素晴らしいことであろう。他の地からの人を受け入れることは、その地の物・人・事の社会的流動性が増すことになる。社会的流動性が増すことで、それまでこの地に生きていた人たちの「世間」なるものが変わる。ともすると閉鎖的になっていた社会倫理が少しずつ変更されてくる。

このよそ者たちは、GDP が増えなくても、社会経済が縮小しても、物・人・事が地域を巡回することができれば、人は十分幸せであることを、地域内外の人たちに示している。このようなことが実感できる生きた方を、全国の人に示している。そして、これらのことを通して、ずっと田舎にとどまって暮らしていた人たちが、農業生産に、田舎暮らしに自信を持ちかけているであろうことが、想像される。大地にしっかりと根を張った生き方を模索始めているかもしれない。

しかし、このような地域社会振興の諸方策は、あくまでも一つの例であろう。これらの諸方策は、それはどれもそれなりに部分的には成功するであろう。でも、ほんの一部の成功にとどまるであろう。これらのことは「縮小社会」の在り方を指し示す一例としてその意味があると思われるが、でも、日本の田舎は、農業は、全体としてはその一層の地盤沈下は避けられないであろう。このような諸方策では、一般化できるものではない。そして、これだけでは、「縮小社会」への意識が大きく高まることないであろう。私たちは、地方の田舎は今よりもっと衰退していくことを大前提として、そのことを覚悟して思考しなくてはならない。

## 2. 田舎暮らしの自給者としての農民は、社会の変化になかなか気づかない

私の住んでいる自治会では、外から移ってきた数少ない人たちを排除してきた。自治会に受け入れていなかった。私は、このことを自治会集会で批判した。新しくあいつにきた人に対して、当時の自治会長は対応もしなかった。初めから、無視した。私はこの移入者との会話を通して、自治会入りを説得してそれを実現させた。移り住んで、10年近くにもなっていた。このことができたのは、私が仕事を退職して第二の人生

として「半農半 X」の生活を始めて日々この地で暮らすようになり、地区内の人との会話をたくさんするようになったためである。私の視線が、職場から地域に向けたことで、この問題に気付くことができた。

さらに、問題がある。私の住むこの地では、自治会と祭りが、つまり宗教がセットとなっている。このことに疑問を感じない人が圧倒的に多い。次の自治会集会は、秋祭りについてである。今年は旧村の中で中心的なことをする順番となったので、自治会長は張り切っている。自治会と宗教は、峻別に分けて対応すべきなのに、この問題に気付かない。

このことの間違いを、私は指摘するつもりです。相手となる自治会長は私と同じ歳の従兄弟である。小さいころより一緒に遊んできた者である。そして、他からの移入者を無視してきたのは、歳が 10 歳違う年上の従兄弟である。またしても、親せき関係内での言い合いとなる。あああ。何とも言えない実態なのだ。彼らは、企業や公務員として外の世界に勤めに出ていて、宗教の強制は良くないことは、建前としては知っている。それなのに、自治会内の事に対しては、そして現実問題に対応するときは、旧来の通りしようとする。ここが問題であろう。閉鎖的な社会倫理が、今もそのまま通用している。

このように実態についての問題を機会として書いたのが、『とんでもないことが!』(図書新聞社発行 青野豊一)である。当事者である者たちは、良いことをしているとの意識なのだ。だから、この本の副題として「美しいことを夢見て、醜いことをする」としている。これは、昨今の自民党の政策そのものに通じることだ。そこで、このことをもっと深く考えていくために、カントと対比してヘーゲル思想を徹底的に批判した。

田舎の人たちの多くは、相変わらず頑迷な保守主義者たちでもあることは、多くの地では、今も変わっていない。イノベーター理論\*における「後期追従者」や「遅滞者」であることが多い。

\*これは、1962 年にスタンフォード大学の社会学者であるエベレット・M・ロジャース (Everett M. Rogers)によって提唱されたものである。新製品や新サービス、そして、ライフスタイルや考え方等が世の中にどのように浸透していくかに関する理論である。

このイノベーター(革新者)理論によると、購買者を次のように分けられる。

① 革新者 2.5%

冒険的で新商品が出ると進んで採用する人々の層。この層の購買行動においては、商品の目新しさ、商品の革新性という点が重視される。この層は革新性は高いが、極めて少数で価値観や感性が社会の多数派とかけ離れている為、全体への影響力は、あまり大きくない。

② 初期採用者 13.5%

社会と価値観を共有しているものの、流行には敏感で、自ら情報収集を行い判断する人々の層である。他の消費層への影響力が大きく、普及の鍵を握っているとされている。新製品や新サービスが提供する利益や恩恵が必ずしも万人に受け入れられるとは限らないため、市場に広く浸透するかどうかはこの層の人たちの判断や反応によるところが大きいとされる。この層の人たちの動向が、新しい価値観や利用法を他の人たちに提示する役割を果たしている。

★「普及率 16%」――市場が拡大したり、考え方等が世の中に浸透していくかどうかの分岐点

### ③ 前期追従者 34.0%

新しい様式の採用には比較的慎重な人々の層。慎重派ではあるものの、全体の平均より早くに新しいものを取り入れる。②の層の人たちからの影響を強く受け、新製品や新サービスが市場全体へ浸透する為の媒介層である。

★②と③の間には、容易に超えられない大きな溝がある。②と同じ提示のされ方では、この人たちは反応しない。そのためには、より広範な大衆的なスタイルが必要とされる。

### ④ 後期追従者 34.0%

新しい様式の採用には懐疑的な人々の層。周囲の大多数が使用しているという確証が得られてから同じ選択をする。新市場における採用者数が過半数を越えた辺りから導入を始める。

### ⑤ 遅滞者

最も保守的な人々の層。流行や世の中の動きに関心が薄く、これが伝統化するまで採用しない。中には、最後まで不採用を貫く者もいる。

田舎暮らしの自給者としての農民は、社会の変化になかなか気づかないことが多い。でも、実は、この頑迷さは、都市に対する「遅れ」を強く意識しているためである。そう自覚していなくても、都会暮らしへの憧れと反発の表れなのである。

このような閉鎖的な社会倫理について、J・S・ミルの『自由論』から文章を引用することで、その問題点をさらに鮮明化したい。

…この人々は、自分の意見のうちで、周囲の人々すべてと意見を同じくする部分、または自分が平素尊敬している人々の意見の意見を同じくする部分に対してのみ、同じ絶対無制限の信頼を置くのである。なぜならば、人は、自分の孤独の判断に対して自信がなければいけぬほど、いよいよ盲目的な信頼をもって、「世間」一般の無誤謬性に依頼するようになるのが常であるからである。そして、

各人にとっての世間とは、彼が接触するところの世間の一部分—すなわち、彼の属している政党、宗派、教会、社会階級—などを意味する。

この世間と言う集団的権威に対する各人の信仰は、他の時代、他の国家、他の宗派・・・が過去においてその正反対の思想を抱いてきたしね現在もそれを抱いていることを、知っても、なお少しも動揺させられるところはないのである。彼は、他の人々の属する世間の、自分たちと意見を異にすることについて、自分が正しいという責任を、自分の属する世間にとつてもらう。

つまり、自分としての判断をしない。そして責任を取らないこと、反省をするということなど、まったくしないのだ。このような意識状況に、田舎暮らしの農民たちはいることが多い。

『里山資本主義』のあとがきの最後に、藻谷浩介氏は次のように書いている。

『里山資本主義』は、・・・これから時間をかけて世界各地で大河になっていくべき、しかしながらまだ細々とした流れに注ぐささやかな一滴であると確信している。マネー資本主義だけで世の中は回るものだという集団幻想に対して、現時点でささやかな異議を唱えること自体に、大きな意味がある。・・・軸者諸賢も、この論考の遠い先にあるものに、どうか思いを馳せていただきたい。

私はこの本に書かれていることや、岡山県の西粟倉村の取り組みを批判するのではないが、でも、疑問符を付けてしまう。「田舎の事を、農民の現状を知らなすぎるのではなからうか?」と。そして、「里山(田舎)の長所だけを、過剰な美談として語る非常に偏った駄本」という批判にも、私は納得してしまうものがある。やはり、まだまだ、大河に注ぐ最初の一滴だと思われる。乾燥した大地に落ちると、瞬間に吸い取られてしまうことになりかねない。

こうすれば日本の農業がうまくいくとか、田舎が再生するとか、という主張を見かけると、現実的には、なかなかそうなるまい。

国家行政は農業規模の拡大を推奨するが、このようなことができる条件にある地は、数少ない。また、農業に付加価値を付ける農業経営を声高く言っているが、残念ながら、安い素材を求めて外国から材料を輸入している外食産業には、とても太刀打ちできないであろう。

「見栄え」を良くする農作業(朝晩の農薬散布)、旬を無視した作物栽培(石油からできた素材で作られたビニールハウスで、石油を使った暖房)、味はたいして変わらないのに無理やりしているあまり意味のない等級づけ、さらに過剰な包装をして高級品と

して販売したり、そしてさらにこのような事での産地間競争となるのであれば、このような付加価値を付ける農業に大きな意味はない。

無農薬有機農業は魅力的ではあるが、夏が熱帯となる西日本では、これは難しい。適時の農薬散布をしなくては、作物が全滅となる可能性がある。また、その担い手がいなくなりつつある。つまり、研究会で今まではなされたようなことは、このままでは一般化できないのだ。

### 3. 農民特有の思考形態、問題の鮮明化

次は、田舎暮らしの農民特有の思考形態を、プルードンの言葉と、シモーヌ・ヴェーユの『根をもつこと』と、『井上ひさしの農業講座』から整理してみたい。このことで、問題点が一層鮮明になると思われる。

●『井上ひさしの農業講座』・・・自分の手で、自分の言葉で、

\* 農業に深い関心をもっていた作家の井上ひさし氏(故人:1934~2010)が、生前自分の故郷の山形県・川西町に生活者大学校を開校(校長・井上ひさし。主催・こまつ座)した。1988年から毎年1度、農業・環境・文化の諸課題をテーマに、一般参加者を募って山形県川西町遅筆堂文庫(井上ひさし氏が生前全蔵書を寄付して出来た図書館)で開かれている。この本は、大学で講座が開かれた初回(1988年8月)から第10回1997年4月講座内容をもとに、構成された本である。

感銘深く感じたのは、実際農業に携わる人の話や、農業に真剣に危機感を抱いている井上ひさし氏や同様に危機感を抱いている学者などの話であった。この本が出版されてから(1997年11月)もう14年ほど経つが、農業の状況は益々悪化している。当時は、まだ食糧自給率は46%(カロリーベース)あったが、現在は40%。農業の後継者は増えず、日本の農業を支える人々は昭和1ケタ代となった。農業を専門に行う人は簡単に育成できない。日本農業は危機そのもの、このことがはっきりと予想できる状況となった。

<井上ひさし>

「ところが、地元の農民はちっとも会場に近寄ろうとしないのです。農閑期を選んだつもりなのに、そしてしつこく誘いもしたのに、話し合いに加わってくれません。ホンモノを作っている質の良い農民と、ホンモノの大切さを知っている質の良い都会の消費者との協力、そこからしか未来が見えてこないことを信じていた我々は、農民たちのこの引っ込み思案をととても残念に思いました。この引っ込み思案、他人と話し合うのを億劫(おっくう)に思う気持ち、「中央」に住む都会人を理由もなくまぶしく見上げてしまう性

向は、そのまま農村出身者である私の性格の一部をなしており、いわば同類、だから彼らが講座を避けたがる気持ちはよく分かります。」

しかし、

「この大事な時期に黙しているのは、それは臆病と言うものです。勇気をもって、農民は、その農民的性質にサヨナラを告げる秋(とき)です。自分の仕事は、命がけで、自分で守るしかない。そして、都会にも大勢の農民支持者が生活しています。そういった市民を、農民は自分の手で探し出さなくてはだめです。」

また、同書で、宇根豊氏\*は次のように言っている。

\*宇根豊 1950年6月2日生まれ。昭和48年福岡農業改良普及所にはいり、農家の技術指導にあたる。のち福岡県農業大学校講師、農と自然の研究所代表理事。農薬の使いすぎに警鐘をならし、個人誌「擬(にせ)百姓」を発行して全国的な減農薬運動をくりひろげる。平成17年「国民のための百姓学」で農業ジャーナリスト賞。著作に「減農薬のイネづくり」など。

「百姓は自分のために徹底的に働く。せめて、子どものため、先祖のため、地域のためでもいい。そう開き直ってしまうほうがいいのではないのでしょうか。こういう言い方をすると、「自分のためにやっている農業に税金をつぎ込むのか」という人がいます。しかし、農業の素晴らしさは、自分のためにやったことが社会的なことに直結していることです。」

「・・・百姓は、いかに個人的な動機や目的で働こうが、すぐれて社会的になっています。そこが、農業のすごいところであり、自信をもっていいところです。そういう面をもっともっと評価していいはずです。「私益」が「公益」になる回路をもっと自分の言葉で表現することです。」

でも、いくらこのようなことを言葉で要請しても、現実の農民は、「自分の手で探したり、「自分の言葉で表現する」ことはなかなかできないであろう。彼らは、「根こぎ」されているのだから。この「根こぎ」について、井上ひさし氏は、同書で次のように述べている。

農業は一生をかけてやる仕事ですから、これが自分にも、家にも、社会にも役立っているという自負がないと続けられないのです。ところが、その「役に立っている」という部分のところ、青年たちの心の中ではかなりグズグズになっていて、精神的に非常に動揺していることが分かるのです。

「根こぎ」とは、草木を根ごと引き抜くこと。転じて、すべて取ること。根こそぎの意味

である。根こぎされた感覚とは、生きていの中で自分の拠りどころとなる環境、つまり、過去(時間)、生きる場所(空間)、そして、大切なものや人などが何らかの事情で奪われた時に生じるものであろう。現代の多くの田舎に住む農民は、大地に、その地にしっかりと根付いている状態で生産活動をしているのではない、と言いえる。そして、都市に暮らしている者たちも・・・。

農民は自分では日々農業労働をしているとの意識だが、実は、これだけでは、何もしないのと同じであった。政府や農協の言いなりになってきたことが、多かった。農民は、泥人形だったのだ。

田舎暮らしの農民にとって、大地に根付かない限り、他の人たちと積極的に交わらない限り、都会の人たちとの積極的な交流をもたないかぎり、「成熟社会」の意識にはなることはないであろう。でも、現実には、彼らは、遅れの意識で都会を妬み、農産物が高価で売れる限りない発展社会を夢見ているとも言いえるのだ。

「根こぎ」されているのは、都市に住む人たちも同じである。多くの人たちは、都市と言う空間に根をしっかりと張ることなく、ふわふわと漂っている。大切なものや人との関係を築くことなく、日々過ごしている。そして、そのことを農業との関係で言えば、彼らは、農業の事をほとんど知らなくなっている。田舎で生まれて都会に出ていった人たちの子供たちは、農作業の実情を知らない。自分の食べている作物を栽培している人のことを、そしてその生産過程を知らない。米や野菜、そして果物が、商店の陳列棚で生み出されているかのごとくの意識である。

農業をつぶってきたのが戦後の農林行政であるとしても、このことを黙認して後押しさえしたのは、このような無知な消費者である。外国から輸入した食べ物では、長距離を輸送されてきた物では、何を食わされているかが分からない。このことを忘れていく消費者が多くいる。やはり、消費者たちが自分の食べているものがどのように作られているかについて、そして農業の現実について、もう少し知っていただかないと、どうにもならないであろう。

このような状態では、「縮小社会」を論じてもどうにもならない。「成熟」した社会意識である「縮小社会」のことを意識することは、なかなか難しいのが実情である。

#### ●ブルードン(1809年－1865年)・・・農民は「過激な所有者」

ブルードンの言葉は、「ブルードンとブザンソン」(齊藤悦則)を利用している。これは、ブルードンの翻訳本が書店で見つけることが困難であるためである。上記の言葉は、ブルードンの私的なメモ帳からの引用である。齊藤氏は、この文章の中で、ブルードンの思想を、「・・・都会生活の華美を虚飾と見、自然とともに質素に生きることこそが人間を本当に人間らしくさせるのだ」という思想である。つまり、生産力をどこまでも発



展させることを彼は必ずしも進歩とみなさない。足るを知るという思想、自然と融和した生き方と清貧を良きものとみる価値観」と、まとめている。

また、プルードン『正義論』1858年から、次の文章を引用している。

「…私たちはこうした無野菜中心の食生活をしながらもよく肥って、…それは私たちが自分の畑の空気を吸い、自分たちの農耕で得た作物を食べて生活していたからである。俗にいうとおり、田舎では、その空気が農民にとっての栄養となるのに、パリではパンを食べても人々の飢餓感はなくなる。…」

プルードンは、農民の子であった。農民に対する優しい視線を持っている。故郷の自然に、山河に限りない愛着を示している。でも、それゆえに、彼らには大きな問題があることを知っていた。そして、嫌っていた。

農民の思想は人民の思想ではない。ド・バルザック氏は農民の醜悪さを描き出したが、それはすべて当たっている。フランスの人口の大半をしめるこの農民。彼らはもっともおぞましく、もっとも利己的で、もっとも心が狭く、もっとも金銭に汚く、もっとも保守的で、もっとも偽善的な階級であり、もっとも過激な所有者なのである。この連中の心根の卑しさによって、地主や工場主や大商人たちの所有に対する真正面からの攻撃は妨げられている。

陰險な土地どろぼう、商取引ではずる賢くたちまわろうとするこの農民こそ、国民の本当の腐敗部分である。体制はそこから力を得、それによって支えられている。[……]進歩にとっての真の障害、それが農民だ。農民と労働者は、中世時代の農民と貴族と同じくらい対立しあっている。いまでは農民がかつての貴族に相当する。[……]この連中をやっつけて封じこめる手だてを見いださないかぎり、農民をひきつれたまま進歩らしい進歩を獲得するには百年以上かかるであろう。逆に、その手だてが見いだされたならば、進歩はまたたく間に得られよう。

\* 私的なメモ帳より

「歴史の見方」(1986年 加藤周一)の中で、「文化的成熟とは、みずからを批判し、みずからを笑うことのできる能力である。…いつの世の中でも、大真面目な自慢話ほど幼稚で、愚劣で、しかも危険なものはない。」と書いている。

プルードンの言う、農民が「もっとも利己的で、もっとも心が狭く、もっとも金銭に汚く、もっとも保守的で、もっとも偽善的な階級であり、もっとも過激な所有者」であるのは、実は、遅れを強烈に意識しているための、ある意味で大真面目(まじめ)な自慢話であるとも言えるものであると、私は解釈している。

農民が過激な所有者であることについては、私もプルードンと同様の意見である。「遅れ」の意識ゆえに、「過激な所有者」なのだ。このことについて私は、『とんでもないことが!』の序と第一章に、その事例を書いている。

そこで、この「遅れ」の意識、「成熟」の意識、そして「根こぎ」と「根付き」というキーワードで、田舎の農民の意識について考えてみることにしよう。そうすることで、「根付き」と「成熟」のための方策が明瞭になるであろう。そして、私たちは、「根付き」のための諸方策を、今からでき得ることは何かをはっきりさせていこうではないか。それは「成熟」した社会意識の形成であり、「縮小社会」の建設の準備となろう。

#### 4. 根をつけるために、「縮小社会」を論じるための基礎的作業

…その手だてが見いだされたならば、進歩はまたたく間に得られよう…

#### ●シモーヌ・ヴェーユ(1909-1943)フランスの思想家

\*この『根をもつこと』は、第二次世界大戦中、ドイツに占領されたフランス再建のために起草されたものである。ヴェーユは、「根をもつこと、それはおそらく人間の魂のもっとも重要な要求であると同時に、もっとも無視されている欲求である」という。この根とは、人間が生きていくうえでその生命力を活性化させるために必要なものであろう。根を外的な圧力で排除されてしまった人間は、無気力状態に落ち込むと同時に、根を失われた者は他者の根をも奪ってしまう。このように、根を奪われた状態を「根こぎ」という。ドイツに占領されたフランス社会は、根こぎ状態であった。そして、フランスを占領したドイツ軍兵士は、根こぎにされた人間であったともいう。根こぎにされた人間は、根をもつ人間を根こぎにしてしまう。人間は、場所、出生、職業、人間関係を通して未来への希望を持ち、生き生きと存続する集団に自然なかたちで参加することによって、根を張り、外的な養分をその社会へのかかわりから吸収して明日を生きる活力を得ている。社会的な強制力で外的な養分の吸収が妨げられてしまうと、人間は無気力な状態となり根をもつことが出来なくなって、自らの成長と好奇心が失われる。軍事的征服がなされなくても、金銭にもとづく権力や経済的な支配は、人間を根こぎにする。劣悪な労働環境で自分の意志に関係なく賃金の為だけに働くことは、根こぎの病を引き起こす。植物は、茎や葉が無くても根があれば、再生はいくらでも可能である。人間も同じように根から吸収する機能を持たなければ、栄養分を吸収出来なくて自己の意志に基づいて成長することが出来ない。根のない人間は、無気力状態になって、生命力を活性化させることができないということになる。さまざまな社会活動に自ら積極的に参加することで外界から刺激を受けそれを自分の成長の糧とする為には、根をもつことが必要なのである。

このように書かれている。

さて、以下にシモーヌ・ヴェーユのマルクス主義についての見解を以下に引用したい。このことで、彼女の思想的立場が理解できると思われる。

…マルクス思想がヘーゲルに端を発することを想起せねばならない。ヘーゲルは宇宙の中で隠れて働く精神の存在を信じ、世界の歴史とはこの世界精神の歴史にほかならず、精神的なものの習いとして世界精神は際限なく完全をめざす、と信じていた。マルクスはヘーゲルの弁証法を「逆立ちしている」と非難し、「足で立たせる」と主張した。そこで物質を歴史の動因たるべく精神にとって替わらせたわけだが、マルクスはこの代替えによる修正を手始めとして、精神の本質にほかならぬもの、すなわち最善をめざす絶えざる熱望を物質に帰属させるがごとく、歴史を構想してしまった。この点でマルクスは、資本主義思想の一般的潮流と深く一致する。進歩の原理を精神から事物へと移動させるとは、すなわち「主体と客体との関係の転倒」に哲学的な表現を与えることであり、マルクスはこの転倒にこそ資本主義の本質をみていた。大工業の躍進のおかげで、生産力はある種の宗教を司る神へとなりあがった。マルクスは意に反してこの宗教の影響をこうむった。マルクスとの関連で宗教という語は意表をつくだろうか。しかし、人間の意志と、世界内で作用して人間を勝利へと導くとおぼしき神秘的な意思とが、奇しくも合致するという信念、それは宗教的な思考であり、神慮への信仰にほかならない。

\*シモーヌ・ヴェーユ『自由と社会的抑圧』

つまり、立っている地平は、ヘーゲルも、マルクスも同じなのだ。批判しても、論争しても、立脚している地面は同じなのだ。同じ地平上で、自分の正しさを繰り返し激しく主張しているだけなのだ。この意見には、私も同意する

○シモーヌ・ヴェーユ…具体的手立て①…<圏内にある>という意識

いっさいは都市で行われ、自分たちは<その圏外にある>という感想に苦しめられているのだ。

農民が<その圏外にある>というのは、遅れを強烈に意識している文化的・精神的な未成熟の意識なのだ。それに対して、「縮小社会」の生活は、このような遅れを意識して進歩・発展をひたすら願う意識とは、極北の関係にある。この遅れの意識ではなくし

て、文化的・精神的に成熟した意識を保持していなくては、「縮小社会」を目指したり、暮らすことはできないのではなかろうか。

農民の根こぎの問題は、労働者の根こぎの問題におとらず由々しき問題である。前者(\* 農民)の病は後者ほど進行していないが、後者(\* 労働者)より醜聞とされるべき要素を有している。

この「醜聞とされるべき要素」については、先のプルードンの言葉を再読すると、そのことに納得されるであろう。

労働者に対して公然たる注意のしるしを与える時には、必ず、農民に対してもそれに見合った注意のしるしを与えなくてはならない。なぜなら、農民たちはきわめて気難しく、きわめて感じやすく、人々が自分たちのことを忘れていているという想念につねに苦しんでいるからである。

労働者たちは、民衆について論じられる場合、問題になるのはひたすら自分たちだけだと信じ込む、あまり奨励すべきでない傾向を有している。…労働者は、民衆に愛情を抱いている知識人たちを説得することに成功した。その結果、農民の間には、政治上で左翼と呼ばれているものに対する一種の憎悪が生まれることとなった。

…彼らが(\* 農民)が物質的に(\* 過去と比べて)より幸福である現在さえ一その場合にも、彼らはほとんどそれを意識しない。なぜなら、数日間の休暇を農村に過ごしにやって来る労働者たちがする自慢話の誘惑に屈してしまうのだから—いつでも、いっさいは都市で行われ、自分たちは<その圏外にある>という感想に苦しめられているのだ。

このような状況にある以上、まずもって、今後農民たちに、彼らが<圏内にあり>という感情を与え得るようなあるものを考案し、それを実施する必要がある。

(\* ロンドンから流される占領下でのフランス向けの BBC 放送で農民についてあまり言及されてこなかったことは、遺憾とすべきである。ナチス・ドイツへの抵抗運動について、たしかに農民は大きな役割を果たしていないが)、しかしながら、このことはおそらく、彼らが存在しつづけているという、繰り返されてきた周知の証拠がまたしても与えられたことにほかなるまい。

\*この文章は、農民がナチス・ドイツ占領下においても存在し生産活動を継続しているということの意義を、フランス社会全体の中での意味を、より積極的に把握しなくてはならないと言う意味である。つまりは、農民は声高く叫ばないし、積極的行動をすることは少ないが、社会全体における農業労働の意味を、食糧生産の意味を、きちんと把握しなくてはならない。存在していること自体がそれなりの大きな意味を有している。このことを、認識しなくてはならない。でも、それを認識していないことが多いのだ。このような意味の文章であろうであろう。

だから、ヴェーユも次のように書いている。

農村の人口減少は、その極限において、社会の衰亡にいたることは明らかである。

そして、

農民たちにも同じだけのものが約束できないなら、労働者たちに新しいもの、よりよいものを約束すべきでない。

政治における最大の難問題の一つを十分意識しなければならない。労働者たちがこの社会の中で疎外感に残酷なまでに苦しんでいる時、農民たちの方は、逆に、同じこの社会の中で、労働者たちだけがそのところを得ているのだという印象を抱いているのである。農民たちの眼には、労働者を擁護する知識人は、圧政に苦しむ人間たちの擁護者としてではなく、特権を有する人間たちの擁護者として映じている。

このような意識については、「維新の会」の橋下氏を支持している人たちの意識をみれば、すぐ納得する。橋下氏は末端の、近所に住んでいる公務員を攻撃することで、日々の生活に苦勞している人たちの支持を得ている。裏でキャリア官僚たちとは手を結びながら。

こんなわけだから、労働者に精神的満足を与えようと考えれば考えるだけ、農民にもそれを与えるようにこころがける必要がある。さもなければ、その結果生じる不均衡は、社会にとっても、また、ひるがえっては労働者自身にとっても、危険な要素となるであろう。

このように、田舎の農民は、自己肯定がなかなかできなくて、遅れをいつも意識していて、「みずからを批判し、みずからを笑うことのできる」能力は、身に着けていないのだ。だから、彼らには、声高く、事あるごとに、他の階層の人たちと同様の待遇を得

られることを説明しなくてはならない。めんどくさくても、この意識を改革していく手立てを実施しないと、「縮小社会」は実現しないであろう。最悪の拡大成長路線を推し進めるための先兵として、我々に向かって牙を向けてきかねない。このことに、留意しなくてはならない。

○シモーヌ・ヴェーユ…具体的手立て②…<土地を労働の手段とみなす>

根をもつことの要求は、農民において、まず所有の渴望である。この渴望は、彼らにとって真の意味における渴望であり、健全かつ自然な渴望である。この線に沿った希望を与えるならば、必ずや彼らの心を惹きつけることができる。所有を生じる形式を規定する法律上の資格を神聖なものとは考えず、所有の要求こそ神聖なものだと考えるなら、ただちにそのようにしない理由はまったくない。農民の手中に、現在彼らの手中にない土地を徐々に引き渡していくために可能な合法的処置はいくらでもある。例えば、土地に対する都市居住者の所有権を正当化するものはなにもないのだ。大農地の所有は、技術的な理由に基づくある特殊な場合にしか正当化されない。そのような場合においても、各人が一部の農地を、集約的に、野菜およびそれに類する作物の栽培に使用し、同時に、協同組合方式で、彼らが共同所有する広大な農地内で、近代的な機械を用い、粗放的耕作方法を実施するといった農民を考えることができる。

農民たちの心を惹きつける方法とは、耕地を、遺産の分割に基づく富としてではなく、断固として労働の手段とみなすがごとき方法であろう。そうなれば、あまり働かないくせに弟以上に儲けている官吏の兄に対して、一生の間負債に苦しみ続けるといった農民の許すべからざる姿はもはや見られなくなる。

この所有については、私は次のように思っている。第一に土地は国有でも、自治体所有でもなく、「天」のものであろう。誰の物でもない公(おうやけ)の物である。そして二番目に、土地は、地域社会全体によって支えられているものである。最後に、その土地を管理して耕作している者の物であろう。この私の意見は、前掲の『とんでもないことが!』にもその理由を書いている。

つまり、「縮小社会」においては、「所有権」の意味の変更をしなくてはならないであろう、ということである。

でも、最近では耕作放棄地が増えているように、田舎の後継者のいない農家は、耕作してもらえらるのであれば、無料で土地を貸与している人もいる。つまり、柔軟な所有主となっている。そこで、この貸与されている土地の実際の耕作者たちの権利を法的に

さらに強くすれば、その人たちの心を惹きつけることができよう。そして、さらに熱心に作物を栽培するであろう。

### ○シモーヌ・ヴェーユ…具体的手立て③…感性の涵養

精神文化の問題は、…農民に対しては、彼らに適した翻訳が必要である。労働者に適したものと同じであってはならない。

…観光客は、農民が風景に興味を示さないという事実を発見した。

一般的に、農村における教育はすべて、世界の美、自然の美に対する感受性を増大させることを本質的な目的とすべきである。

現在の体制の骨子は、思考に関する一切のことがらもっぱら都会の所有物であって、農民はその大部分を理解する能力に欠けているがゆえに、きわめてわずかなその小部分を分かち与えてやるといったかたちで彼らに示されることにある。

これは、ただ単に程度があまりどぎつくないというだけで、やはり植民地的な心性である。

ブルードンも、「農民が風景に興味を示さない」ことについて次のように書いている。

農民ほどロマンチズムや観念論から縁遠い人間はいない。現実にどっぷりと浸かって、ディレッタント\*などとは正反対の生き方をしている。田園風景をどんなに素晴らしく描き出した絵でも、それに 30 スウも支払うのは捨て金だと思ふ…。白状すると、私も昇る朝日や沈む夕日、月の光四季のうつろいを描いたものが楽しめるようになるまでには、時間とそれなりの学習が必要であった。

\* 齊藤悦則「ブルードンとブザンソン」中の引用文(ブルードン『正義論』1858年)から転載

\* ディレッタントとは、芸術や(哲学などの)学問が大好きだけれども芸術家や学者といった専門家ではないという、その道のアマチュアの事。芸術や学問を趣味として愛好する人のこと。

ブルードンのこの文章に、私は納得する。大学に通い、街の生活を体験することで、そして、芸術の知識を少しずつ得るにつれて、やっとそれなりの楽しめる感覚となってきた。これは、間違いのないことである。

今の社会に流布しているような美意識を強要しては、都会人の感覚を正当なものとしてマスコミを通して強要しては、田舎暮らしの者の感性は成長しない。やはり、日々の労働に基づく、またその生産物に対する収穫の喜びを感受するものを基礎としなくてはならないであろう。そして、この喜びを抱く基礎的な感受性は、「ホンモノを作っている質の良い農民と、ホンモノの大切さを知っている質の良い都会の消費者との協力」(\*井上ひさし)関係からしか形成されないであろう。「そこからしか未来が見えてこない」(\*同上)ことは、はっきりしている。だから、そのための諸方策を、「翻訳」を工夫しなくてはならない。

#### ○シモーヌ・ヴェーユ…具体的手立て④…原風景の再確認

農業では、現金収入が期待しているほど得られない。農業の年間サイクルを体得するには何年も要する。それまでは、失敗ばかりである。そして、体得しても低収入であることを覚悟しなくてはならない。それに、労働がきつい。夏の日差しの中で大粒の汗を流して、労働しなくてはならない。これを、覚悟しなくてはならない。

また、その人にとっての何らかの「原風景」がないと、この労苦を引き受けることはできない。私には、竹林の原風景がある。両親の傍で、遊びか労働かよくわからないことをしていたのが、何故か輝いて思い出される。私の中では、竹林の光は輝いている。朝日が竹の幹と葉に当たり、乱反射している。黄緑色の細い葉、緑の幹、下を見れば、黒い地面と枯れ落ちた黄色と茶色の一面の落ち葉。そして、すがすがしい空気が身体に沁みこんでくる。筍掘りで身体はぎしぎしときしみ始めても、私はこの空間が大好きなのだ。

だからといって、私の原風景の中の両親の表情は、はっきりしない。両親が大好きだというのではない。はっきり言って、嫌いであった。あの生き方、私への対応には、今でも嫌でいやでたまらない思いになる。

このような原風景は、一枚の印象派の絵画である。セザンヌの『サント・ヴィクトワール山』のような絵画の景色である、と言った方がよいであろう。印象派以前の微細なことまで鮮明に描いているような絵画ではない。そして、このことを文学的に言えば、国木田独歩の『忘れ得ぬ人々』に描かれているような原風景である、とも言えるであろう。

…春の日ののどかな光が油のような海面に融けてほとんど漣(さざなみ)も立たぬ中を船の船首(へさき)が心地よい音をさせて水を切って進行するにつれて、



霞たなびく島々を迎えては送り、右舷左舷(うげんさげん)の景色をながめていた。菜の花と麦の若葉とで錦を敷いたような島々がまるで霞の奥に浮いているように見える。そのうち…

…自分はこのさびしい島影の小さな磯を漁っているこの人をじっと眺めていた。船が進むにつれて人影が黒い点のようになってしまった。そのうち磯も山も島全体が霞のかなたに消えてしまった。

その後、今日が日までほとんど十年の間、僕は何度この島影の顔も知らないこの人のことを憶(おも)い起こしたろう。これが、僕の「忘れ得ぬ人々」の一人である。

このような景色である。

このように「竹林の光」が輝いていることを、シモーヌ・ヴェーユは次のように書いている。

(\* 農業)労働がその子供にとって、大人たちだけに与えられている素晴らしい遊びのように思われる瞬間があったはずなのである。

…農民の子どもと労働とのこの最初の完全な接触、この最初の陶酔は、いつまでも変わることなく、彼の魂の奥底に、その陶酔を浸透せしめるような荘厳な祭式によって聖なるものとされなくてはならない。

この原風景があるから、身体がぎしぎしきしみだしても、労働できるのだ。私にとっては。これは、間違いない。生活費を稼ぐためだけでは、とても労働できるものではない。私にとっては。しんどい時こそ、このような「原風景」が必要なのだ。

しかし、

…数年もたつと、この子供らしい熱狂は枯渇してしまい、仕事は分かり切ったものとなり、…そうなった瞬間から、彼には未来がなくなる。

そこで、

彼をとらえる新しい渴望に対しても糧を与えてやらなければならない。若い農民にとって、その一つは旅行である。…そのためには、農民たち対しても、何かフランス巡歴<\* 19 世紀までのフランスの労働者・職人は、一人前になるまでは、フランス各地の労働現場を渡り歩いて腕を磨くシステムがあった。>に類似した組織が問題になろう。

農民たちにおける旅行への想いの強烈さ、実現以前の約束の状態においてさえ、かかる改革がもたらしうる精神的重要性、ましてやそれがひとたび習慣となった際のその重要性は、想像以上のものがある。若者にして、農民たることをけっして止めることなく、数年にわたって世界を巡歴したのちその家に戻るならば、彼の不安は鎮められ、家庭を建設するようになるだろう。

ここに書かれていることは、その通りであろう。心の中の「原風景」を再確認できるシステムを導入しなくてはならないであろう。

私は 60 歳で第一の人生を終了させて、第二の人生として農業労働を日々の日課とした。それまでに、いろんな農園を、独自のスタイルを確立している農業者を訪ねることもしてきた。だから、今続けていけるのであろう。

●私の意見、具体的手立て⑤…後姿で評価を!-「新規農業就労者」について…

私は以前、次のようなことを、「縮小社会研究会」で発表した。そこでは、現状での田舎暮らしの困難さと、新規就労者にとって必要なことを、私なりに示している。

都会から来た「新規農業就労者」は、私の住んでいる市では、どれも失敗して就労資金が交付されなくなると都会に帰っている。その理由としては

①農業では、現金収入が期待しているほど得られない。農業の年間サイクルを体得するには何年も要する。それまでは、失敗ばかりである。体得しても低収入であることを覚悟しなくてはならない。

②労働がきつい。夏の日差しの中で大粒の汗を流して、労働しなくてはならない。固い意志がないと続けることができない。あるいは、その人にとっての何らかの「原風景」がないと、できない。私には、竹林の原風景がある。両親の傍で、遊びか労働かよくわからないことをしていたのが、何故か輝いて思い出される。私の中では、竹林の光は輝いている。朝日が竹の幹と葉に当たり、乱反射している。黄緑色の細い葉、緑の幹、下を見れば、黒い地面と落ち葉。そして、すがすがしい空気が身体に沁みこんでくる。身体はぎしぎしときしみ始めても、私はこの空間が大好きなのだ。

③田舎の空き家に住み着くと、今も周囲の人たちのまさしく互酬的な人間関係に振り回されてしまう。このことについては、私の『とんでもないことが!』(図書新聞社)に書いている。宗教の押しつけについて書いている。そして、ヘーゲル批判をしつこくしてい

る。周囲の地域住民は、「美しいことを夢見て醜いこと」をしていることには、まったく気付かない。新規にその地に住み着いて周囲に気を遣っていると、まさしく遠慮なく心の中まで抑圧されてしまう結果となる。ここで生活すること自体が、耐えられなくなる。

だから、このような田舎の人間関係を無視して、ひたすら働き収入を増やして生活の安定を図るといった強固な思想性が、どうしても必要となる。居住地の周囲の人たちの人間関係に埋没しては、評価を気にしては、暮らしは成り立たない。

④田舎暮らしには、四季の自然の移り変わりに感動する感性が必要である。金銭的損得感覚だけでは、田舎暮らしはできない。農民たちに、このような感性があるといっているのではない。ないと断定した方がよい。私の周囲の人たちは、自然の景色に心が動いているようにはとても思えない。でも、新規に始める者には、この感性がいる。四季の変化に、日々の単調な労働の中に、喜びを見出す感性がいる。

農業の年間サイクルを体得できて、生活がそれなりに安定してくると、周囲の人は評価を変えてくる。だから、田舎の人間関係に振り回されてはいけない。付き合うな!と言いたい。一生懸命働いている、その後姿で評価されたらよい。頑張ることができたら、そこから新しい互酬的なネットワークが創り出されてくる。そうなると、田舎暮らしの楽しさを、それなりに味わえるようになる。

こうなるためには、周りの物質的、そして精神的な無駄なものを、人間関係を放り捨てなくてはならない。生活スタイルをシンプルにしなくてはならない。(2013年4月)

ここには、シモーヌ・ヴェーユと似たことが書かれている。

#### ●具体的手立て⑥・・・都市から農村への人口逆流・・・

第二分科会のメールとしていただいたものに、もう一つの「手立て」が書かれていた。誤解が生じるといけないので、そのメールの文章を全文以下に掲載したい。

\* 下線は、青野が付けた。

.....  
青野様へ

悪評を書く人についての御推察、私も同感です。

大抵の批判者は『批判するだけで、基本的に何らの代替策や案は持ち合わせていません』。

彼らは現状や過去、或いは将来に関する不安など不平不満のはけ口として他者への攻撃を行うのであって、自らの思想や理想をもって語るものではありません。

(勿論、紋切り型で決めつけるのはよくありませんが…)

そう考えると、彼らは自らの存在意義や理想、理想などの根源的な『根』は持ち合わせておらず、または有るけれども捨て去ってしまっているか、そのことに気が付いていないのではないのでしょうか。

思うに『根』というものは、多分に幼少期や思春期の記憶や経験に依るところが大きいのではないかと思います。それを肯定できないということは自己の否定ということになり、『(自己の)根が腐った状態』ということになりはしないのでしょうか。自分にしっかりとした『根』があれば都会であろうが、異国であろうがしっかりと根を張ることは可能だと思います。

でも望むと望まざるとも自己を見つめ、肯定しない限りは自らの可能性を生かすことはいかなる場所においても不可能でありましょう。

精神論になってしまいましたが、よほど彼らは都会に対するコンプレックスと自己否定に囚われているように私には思えてなりません。

(ある意味で気の毒で有るかも知れません)

自分はあまり偉そうなことは言えませんが、今後の社会を考えるには否定するだけでなく代替案を常に考えるように心がけています(常にうまくいくとは限りませんが)

話は変わりますが、自分なりに『違和感』について考えてみました。あくまでも『里山資本主義』は農林漁村などについての産業振興の有効策であって、都市部には別の策が必要でしょう。

都市を支える農林漁村とのバランスが崩れ、都市が過度に肥大化してしまったことも一因ではないのでしょうか。

ならば都市から農村へのある程度の人口逆流は必要であり、農産物を中心とした一次・二次産業の保護貿易的国際戦略もまた必要であると思います。

(つまり私はTPPには反対を唱えざるを得ません。これに関してはインドネシアの立ち位置を見習うべきでしょう。あまり詳しくはありませんが…)

かなり脱線してしまいました。でも『根』の話はかなり根源的な部分を突いていると思いますので自分なりにある程度の考察は必要かと思いました。

失礼致しました。

橋本

.....

この「都市から農村への人口逆流」を図ることが、一つの手立てとなるであろう。で

は、どうすれば「都市から農村への人口逆流」が生じるであろうか。

第一には、やはり行政の強力な支援が必要である。これなくしては、「都市から農村への人口逆流」はなかなかできないであろう。このような行政の強力な指導なくして、旧来から田舎に住んでいる人たちが、新規の人を受け入れることは難しい。

第二としては、田舎の人口がもつともつと激減して、耕作放棄地ばかりとなり、村落としての機能が維持できなくなり、日々の生活の困難さを思い知ると、人口逆流がしやすくなる。田舎の互酬的な人間関係を無視できることとなる。新規就労者が、好きなようにしたらよいことになる。行政からの生活資金の支援さえあれば、新規農業就労に意欲があれば、頑張れるであろう。

\* 香川県はまだまだ人口があるために、過疎が進行していないために、例えば高知県の取り組みと比べると、行政としての取り組みははなはだ不十分なのだ。そのために、新規就労者として居着くことにはなっていない。

第三としては、「帰農」化を促す社会経済状態とならなくては、人口の逆流はなかなか生じないであろう。社会的貧困化の進行、生活苦等が発生すると、都市から田舎へと人の移動が多量に発生するであろう。このような事態にならないと、……。悲しいかな、これが現実であろう。しかし、これでは、最悪の時代となる。

イギリスでは、最近、都市から田舎へと暮らしの場所を変更する人たちが増えてきていると聞く。このような現象は、成熟社会ゆえの意識変容なのかもしれない。このことについては、後日に調べてみよう。

#### 終わりに

最悪の事態になることを回避するためには、いかようにしたらよいのか？このことを、これから考えていくしかあるまい。その時、上記に記載したシモーヌ・ヴェーユの指摘している具体的手立ては、一つの示唆になると思われる。

このことは、「縮小社会」への移行を論じるための基礎的な作業となるであろう。私たちは、井上ひさし氏の次の言葉を一つの励みとして、いろいろと思考し、実践してみようではないか

「遅れたものが勝ちになる」

世の中と言うものは、どんどん先にいってしまうけれど、世の中に合わせて変わっていかないで、自分の信じることを、一生懸命作ったり、やったりしていれば、後になって、必ず受け入れられる時代が来る、ということです。その周期は、だいたい15年くらいようです。

『井上ひさしの農業講座』